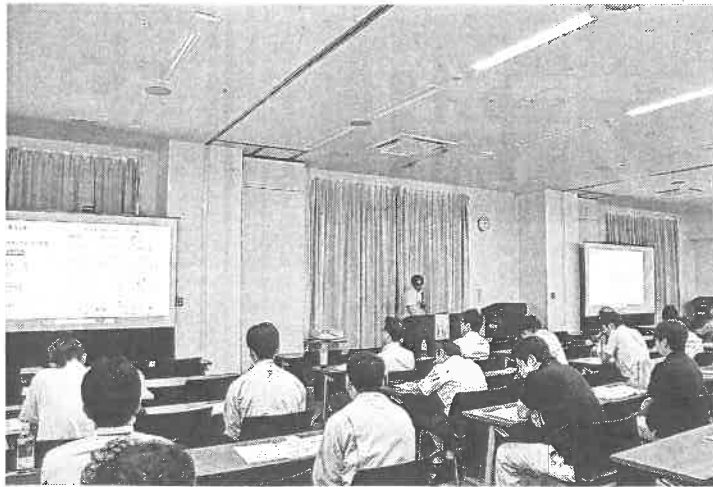




（SP会）中四国支部（越）
スピーカーリストの会

＝SP会中四国支部＝ 第11回講演会を開催 空間情報に関する動向など学ぶ

智貴政支部長は7日、山口市のKDDI維新ホールで「スペース・ポータルin中四国（第11回）講演会」を開催。山口会場とサン・イレブン高松会場をWEBでつなぐハイブリッド方式で行い、両会場合わせて67人が参加した。共催は日本測量協会中国支部。

はじめに越智支部長は「支部では、会員や空間情報に携わるみなさんへ目的に講演会を開催している。講演では、産官学から講師を招き、空間情報に関する最近の動向や取り組みなどを紹介する。講演が有意義な時間になることを願っている」と挨拶し、越智支部長が基本方針や事業報告・活動報告、活動計画など支部活動及び今後の展望について説明した。

その後、山口大学大学院の赤松良久教授が「空間情報技術が拓く流域環境と防災の未来」をテーマに基調講演を行った。赤松教授は「2100年に平均気温が2度と4度上昇するシナリオがあり、2度上昇すると12%（約15mm）、4度では27%（約33mm）日降水量の年最大値が増加し、50mm/h以上の激しい雨はそれぞれ約1.6倍、約2.3倍増える。能登半島では、地震の後に豪雨災害が起きるなどマルチハザードと呼ばれる厳しい災害も発生している。気候変動で、水温上昇による水質や生態系の悪化により流域環境に悪影響があり、渇水が進むことで河川水や地下水の利用制限など利水面にも影響が出る。治水、利水、環境を総合的に定量評価するために、空間情報技術とシミュレーションの両方の高度化が必須」と述べ、激甚化する気象災害と流域総合水管理の必要性や衛星、UAV、GISによる高解像度データ基盤、AI・物理モデルによる予測シミュレーションの高度化、流域デジタルツイン、流域DXなどサイバーフィジカル流域管理について解説した。

また、国土地理院防災・地理空間情報企画センター地理空間情報企画課の山崎航課長は「ジオAI（地理空間情報×AI）の推進に向けた政府の動向」、山口大学応用衛星リモートセンシング研究センターの江口毅助教が「衛星データによる3次元地盤変状解析を用いた2024年能登半島地震の水道管被害の分析」、中四国支部の副支部長で復建調査設計企画開発本部兼社会デザイン創発センターの新宮圭一氏は「東日本大震災の復興・復興の経験と現在の技術を踏まえた今後の対応の展望」をテーマに講演した。

このほか、徳山工業高等専門学校環境建設工学専攻1年の豊田良生氏が「損傷領域の曖昧性と重量を考慮した確率的Segmentationシステムの構築」と題し、研究成果を発表した。

総合水管理の必要性や衛